

『黒騎士の愛しき銀珠』

著：鳥舟あや

ill：笠井あゆみ

「まだ助かる」

「中途半端に助かるより、死んで生き返ったほうが早いのに？」

サルスは大きく両目を見開き、奇異の眼差しでフィキを見やる。

サルスは口の立つ女で、フィキに詰め寄り、「ネスは死にたいの。一刻も早く私に殺してほしいの。私も早くネスを楽にしてあげたいの。邪魔しないで」と、ネスが言いたいことをぜんぶ言ってくれた。

「分かっている。だが、この怪我ならば治療次第で治る。殺す必要はない。この怪我と、殺される時の痛みなら、殺される時の痛みのほうが酷い」

フィキは、人間の道理を銀種に適用しようとした。

たったひとつの命しか持っていない人間を助けるように、銀種を助けようとした。

「あのね、帝都の将校様、ちょっとは考えて物を言いなさい。ここでネスが死なずに生き残って、全治六カ月とかになってみなさいよ。怪我は痛いし、苦しいし、体は思い通りに動かさなくてイライラする。寝たきりの私たちの世話なんか焼いてくれる人いないし、病院にも入れてもらえない。自力で起き上がるようになるまでずっと安置室に寝かされて、生死の境を彷徨いながら回復するのを待つしかないの。傷が治るまで半年間ずっと動けなくて、痛くて苦しいまま治るのを待つくらいなら、いまさっさと死んで、一カ月で生き返ったほうが楽なの！ そしたら怪我もない状態で復活できるし、痛くない！ それが銀種の基本的な考え方なの！ そもそもネスは優秀だから、もっと早くて数日で生き返られる！ こうやってここで生き永らえさせて、痛い思いさせるほうが可哀想なの！」

「だが……」

「ああもう！ 分かんない人だな！ 銀種は死んでも生き返るの！ わざわざ怪我したまま重傷で生きて苦しい思いする必要ないの！」

「……っ」

ネスは「とっとと殺してくれ」と伝えるために口を開く。

喉を使おうとすると血が絡まって噎せて、咳き込む。咳き込むと腹筋に力が入って出血が酷くなる。溢れた血が飛んで、フィキの頬を汚した。

銀種は厄介だ。

死んでも生き返るという特殊性以外にも、賦活能力が高いという利点がある。

怪我を負ったその瞬間に、怪我が治り始めるのだ。

そして、その治癒にかかる時間は極端に短く、人間よりもずっと速く回復する。

いまも、ネスの体はなんとか自分の体を治そうと肉を修復し、血を増やし、血管を繋ごうとしている。だが、治る速さよりも死が訪れる速さのほうが速い場合は、ただ単に死に際の苦しみが長引くだけになる。

いまのように、ネスが苦しむ時間だけが長くなる。

確かに、このまま放置していればフィキが言うように命は助かり、サルスが言ったようにいずれは完治するかもしれないが、ネスはそこまでして苦しみながら助かりたくない。

早く死にたい。

「ネス、しっかりしろ」

「研修、……ほかのやつに……引き継げ……」

「そんなことはどうでもいい」

「俺、も、……生きるの……そんなに……執着してないから、殺して」

殺して、生き返ったら、また戦える。

別にどうしても戦いたいわけじゃないけど、わざわざ痛くて苦しい思いはしたくない。

無駄に命を長引かせたくない。

「私たちは勇気ある生き物なの。あなたたち人間とは違うの。死ぬことは恐ろしくないの。これが私たちの性格で、性質で、考え方で、生き方で、死に方なの。人間とは違うの。だから人間は邪魔しないで」

「銀種には勇気などない」

サルスの言葉をフィキが一刀両断した。

フィキは続けて、「お前たちは勇者でもなんでもない。傷つくことや、痛いことや苦しいことが嫌いで、この世の苦痛から早く逃げ出したいと泣く、可哀想な生き物だ」と断言する。

ネスは、まったくもってそのとおりだと思った。

結局は、死ぬほど痛いのを我慢するくらいなら、とっとと死んで、傷が完全に癒えた状態で生き返ったほうがマシ、という考えなのだ。少なくとも、ネスはそうだ。楽なほうへ逃げているのだ。

そう考えるとやっぱりこのフィキという男は、銀種の本質をいくらか理解しているような気がした。

「……とり、あ……ず……、もう、……たのむ……っ、ら、……死なせて」

ネスはフィキの腕を掴み、傷口からどかせる。

頭が回らなくなってきた。痛いのか、苦しいのか、よく分からない。

こんなに長く死に際に生きていたことがないから、思考がまとまらない。

早く死にたい。死にたい。死にたい。それだけで頭がいっぱいになる。

生きているのはこわい。つらい。いたい。くるしい。

早く死にたい。

息が乱れて、恐怖が押し寄せてきて、泣きたくもないのに泣きそうになって、でも、もう泣くだけの余力もなくて、ただ漠然と生きていることが恐ろしくて、死にたい。

いつもならどうしていただろう？

そうだ、いつもなら、死に際に誰の手も借りられないなら、自分でケリをつけていたんだ。  
自分で死んでいたんだ。

そのために、災種殺しに必要なない剣を装備しているのだから……。

ネスは、己の剣を求めて、指先を彷徨わせる。

「ふざけるな」

その手を、フィキが掴んだ。

ネスの血に染まった手で、ネスの手を強く掴んだ。

「……？」

頭に血が回らず、ネスは、フィキの言葉の意図するところが察せられなかった。

「ネス、お前いますぐに生き返れ」

「……？」

「俺と契約しろ」

「……………」

「潔く死ぬ勇気があるなら、俺と契約して生き返る勇気を見せろ。お前のクソみたいな弱気の顔  
なんぞ見たくもない。ただちに俺と契約して、ただちに生き返れ」

「……………」

なに言ってんだ、こいつ。

どういう意味だ。

分からない。

どういう考えからそういう発言に至ったのか、理解できない。

頭が回らない。

とにかく、早く死にたい。苦しい。腕も持ち上がらなくなった。

死にたい。

「ネス！」

フィキは、男前の顔面で必死にネスの名前を呼んで、「とっとと俺と契約しろ！」と叫んでいる。

馬鹿な死に方をするなど叱ってくれている。

頬に、雫がひとつ落ちる。

……男泣きしてんじゃねえよ。ネスは口端を持ち上げた。

自分が死ぬ時に泣いてくれた人間は初めてだ。

初対面に近いネスを相手に、こんなにも感情移入するほど優しい生き物を初めて見た。

それどころか、今日はネスを庇ってくれた。

銀種は生き返れるのに、わざわざ盾になって、怪我をしてくれた。

護衛官は銀種の盾だけれども、本気で銀種の盾になる護衛官は少ない。死んでも生き返る奴の  
ために自分が怪我を負うのは馬鹿らしいと思っているからだ。

でも、フィキは一瞬の躊躇もなく盾になった。

自分が傷つくことを恐れなかった。

勇気があるというか、豪胆というか……。

不思議な男だ。

ネスがどういう性格なのかも知らないくせに契約しろと言った。

二人の相性もまだ分からないのに「契約しろ」と言ってくれた。

契約したら、一生離れられないのに……。

自分の目の前に死にかけの銀種がいるから、それを助けるために、そう言ってくれた。

自分の損得勘定なしに、ネスを救うためだけに……そう言ってくれた。

こういう男が自分だけのものになったらいいなあ……ネスはそんなことを思って、心で笑った。

表情で笑うだけの力がないから、心の底で頬を持ち上げた。

ネスは、これまでに何度も戦死している。

死ぬのはこれが初めてじゃない。

何度死んでも、死ぬのはいやなものだ。

でも、このまま生き続けるのはもっといやだ。

それに、死に際にこういう気持ちで死ぬのは初めてで、それがわりといやじゃなかった。

死に際に自分のために泣いて叫んで名前を呼んでくれる人がいるというのは、とても幸せだった。

誰かに看取られて死ぬのは、幸せだと思った。

「ネス！ 契約しろ！」

「……………はい」

いま、俺は返事をしたか？

……ああ、うん、たぶん……返事をしてしまった気がする。

よく分からない。

なぜ、返事をしたのか分からない。

返事をしたのかどうかも分からない。

でも、返事をしてしまったら、契約成立だ。

無意識のうちに己がそれを認めてしまったなら、契約は成立だ。

「ネス！」

むかつくくらい、声がいい。

その声を聴きながら、ネスは死んだ。

孔雀色の瞳は、この世で見たどんな死に際の景色よりも一番きれいだった。

銀種と契約した人間は、絶対者という存在になれる。

絶対者になると、いくつか特別な恩恵を受けられる。それは、銀種から与えられる特別な恩恵だ。この恩恵があるからこそ、絶対者はたったひとつの命を賭けて銀種の盾になると言っても過言ではない。

だが、絶対者自身がなにか特別な能力を有するわけでもなければ、強くなれるわけでもない。当然、災種を殺せるようになるわけでもないし、不老不死になるわけでもないし、死んでも生き返る人間になれるわけでもない。

でも、死んだ銀種を生き返らせることができるようになる。

どういう仕組みでそうなるのかは解明されていない。

けれども、銀種が、たった一人の人間を自分だけの特別だと認めて、信じて、信頼を寄せて、頭と心で納得したら、その人間は銀種にとっての特別な人間になる。

特別な人間から与えられる刺激というのは、目覚めるのに最適なのかもかもしれない。

「……………」

ネスは重たい瞼を開き、その重さに負けて閉じる。

それから、もう一度、ゆっくりと目を開く。

目の前が、青と緑の孔雀色でいっぱいになる。きれいな眼の色が、ネスだけをじっと見つめている。

その瞳が、ネスから遠ざかる。

唇が、遠ざかる。

「ネス」

ついさっきまで触れ合っていたフィキの唇が、ネスを呼ぶ。

ネスの後ろ頭を包むように持ち上げる大きな手があって、その掌がネスの首筋に触れている。首を支えるのと同時に、脈を測っているのだろう。

フィキは額をこつんとくっつけてネスの瞳を覗き込み、「まだ生き返ってないか？」と尋ねながら、もう一度、口づけようとする。

「……もういい、生き返ってる」

ネスは腕を持ち上げ、フィキの顔面を遠ざけた。

「ああ、生き返ったか」

「……………おかげさんで」

ネスは地面に手をつき、上半身を起こす。

ついさっき死んだ場所で、生き返った。ただそれだけのことなのに、気恥ずかしい。

なんで銀種は絶対者からの口づけで生き返るんだろう？

こんな恥ずかしい生き返り方、居た堪れない。

「まだ動くな」

立ち上がろうとするネスを、フィキが押し留める。

フィキの腕は、当然のようにネスの背中を支えている。地面に片膝をつき、ネスの血に汚れた軍服で、でも、自分のことはなにひとつ構わず、それこそ肩の怪我の手当てもしないままネスを

気遣う。

「……………」

ネスは、自分の腹に手を当てた。

災種の爪が突き刺さっていた腹は、傷を負う前の状態に戻っていた。ネスの気付かぬうちにフィキの手でその爪も抜かれたらしく、生き返ったと同時に傷口も塞がっている。ただ、確かにそこが深手を負っていたことを証明するように、戦闘服が災種の爪で裂かれて破れ、血まみれだった。

「ネス、すごい……ほぼ完治した状態で生き返ってる……」

ネスを心配して傍にいたライカリが感心している。

銀種には個体差があって、生き返った時点で傷が完治している者もいれば、とりあえず戦える程度で生き返る者もいる。ネスは傷も塞がり、大量出血した血液もほぼすべて補われた状態で生き返っていて、すぐにでも戦線復帰できそうだ。だが、表面的には完治したように見えても、実際には血液濃度が極端に薄かったり、骨や組織の結合が甘くて動いている最中に再崩壊を起こす危険性がある。フィキはそれを心配して常にその手でネスを支え、寄り添っていた。

「……………」

ネスは、自分の唇に触れる。

指先に血液が付着する。記憶にはないが、死ぬ間際、最後にひどく血を吐いたらしく、口の中も、外も、血の味と匂いで気持ち悪かった。

「……ネス、大丈夫か」

尋ねてくるフィキの唇も、ネスの血で汚れている。

ネスは手を伸ばし、フィキのその唇を拭った。

「……ネス、……どうしたの？」

ライカリがネスを訝しげに見ている。

ネスはいつもどおりにしているつもりだが、どうやら、ライカリから見たネスの様子はいつもどおりではないらしい。

「初めて絶対者の力で生き返ったから、ちょっと感覚がついていってないのよ」

絶対者持ちの銀種が、ライカリに「騒ぐことではない」と諭している。

「でも、こんなに、ぼんやりして、ふわふわしてる……」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>